

仏念 ……二月十一日、基隆東本願寺にて講話の一節……

往相の行者にしても、還相の菩薩にしても、その心内に燃ゆる聖なる火、信心、無上菩提心は、今語るが如く、莊嚴主功德、即ち、正覚阿弥陀の善力の為に住持せられることによつて、不滅であり、散失しないのであります。

「住持」とは、住は「不異不滅」のことであり、持は「不散不失」のことでもあります。そこで住とは体常とて、仏力の永遠にわたつて常住不滅のことでもあります。これを、大経には「建立常然無衰無変」と説かれてあります。仏土は誠に、かくの如き仏力によつて撰持せられているのであります。住持の「持」とは「用堅なり」と言われて、大用が堅固であるが故に、不散不失であることでもあります。如来浄土の一切眷族はかくの如き常住不滅の仏力に住持せられて聖なる火を生きているのである。

論註下の釈には、それが不朽薬の譬えを取つて説かれてあります。不朽薬という薬を種子に塗つておけば、種を水においてもただれず、火におくもこがれず、因縁を得て芽を生ずるが如く、若し、凡夫人、一度名号を聞信して往相廻向の世界に出され、安樂浄土に生じ、更に、後の時、意に、三界に生じて衆生を教化せんと願じ、浄土の命を捨て、三界雑生の水火の中に生じても「無上菩提の種子畢竟じて朽ちず」何をもつてなれば、正覚阿弥陀の善住持の力によるからであると説かれてあります。

この国土莊嚴の主功德を、論註上には、

「住持とは、黄鵠わうこく、子安を持てば千齡更りて起り、魚母、子を念持すれば、がくを逕てがく壊せざるが如し 夏水ありて冬水無きをがくと曰ふ」  
と説かれてあります。

黄鵠とは鶴のこと、鶴の親が、千載永く逝きし子と呼んで、復活せしめたこと、それの如く、声聞が無上道心、即ち大菩提心を発すということは、千載永く逝きし子に、再び息をふきかえす術のなきが如く、到底あり得べからざることである。然るに、如来本願力、善力によつて、大信心即ち無上菩提心を発すのである。自損損他より他にない衆生が、自利利他一如に成就せられたる仏心の廻向によつて、無上菩提心を発すということとは、全くあり得べからざることであるのであります。生ずべからずして生ずること、誠に、鶴が死んだ子と呼び、遂に活きかえらしたが如くであります。

魚母の喩は、浄土の菩薩が三界水火の雑生の中に生じて、しかも、正覚華を動ぜざるに喩えられたもので、不朽薬の喩の如く、応に壊すべきもの、失うべきものが、如来還相住持の力によつて破壊しないことを喩えられたものであります。魚母の喩については、智度論三十七に、

「以仏念故而不墮落。譬如魚子母念 則得生不念則壊。」  
とあります。今はこれによられたものであります。

「仏念を以ての故に而も墮落せず」とは、誠に頂戴すべき聖句であります。念仏ということについては、誰も本気になる、仏を念ずるというについては、色々と心配するけれども、「仏念じたまう」を忘れて、念仏しようとする、そこに、如実でない念仏、

自力の念仏が頭をもたげるのであります。念仏以前に、仏念がある。仏念によって、念仏が成就するのであります。「仏念を以ての故に墮落せず」とは、考えさせられる言であります。

私が本部に帰ると、猫が膝に来ます。しかし、どんなに私が念じても、猫には通じない。そこに畜生のあさましい世界がある。猫に近いほど他人が我を念じて下さることがわからない。他が私を念じて下さる世界を持たないのであります。

父は子を念じている。母も我が子を念じて、昼夜おくことが出来ない。しかるに、子は、その父念を知らず、母念を憶わない。そこに子供の墮落がある。「仏念を以ての故に墮落せず。」猫は、私が何と念うて頭をなでても、それを知らない。しかし畜生は余分な悪はしない。人間は悪を行ずる。世の放蕩無頼の徒は、人のことなら、かれこれと思い、念ずるが、他人の思いは受け取らない。やがて逆悪の極、死刑に処せられるが如き者も、父います日、母ありし時、あるいは、兄弟、乃至知人尊長、師友のその人を念うのあまり言つて聞かせた一言を受け取っていたら、かかる憂目はなかつたかも知れない。

誰の言うことも念ずる心も受取らないで、貪欲我慢を貫いてゆく、そこに墮落の世界があります。「仏念を以ての故に墮落せず」「父念を以ての故に墮落せず」「母念を以ての故に墮落せず」「師念を以ての故に墮落せず。」誠に千里の遠きに旅するとも、母念を憶うて生きる子は、墮落はしない。孝子に墮落がないのは、その為であります。ましてや、永遠不滅のみ親が、金剛不壊の神力、本願力を、念仏の衆生の上に打込んで撰取し、住持して下さる、その一念が、衆生心中に徹入して、大心海を廻向顕現して下さるのであります。故に「仏念を以ての故に而も墮落せず。」往相の行者にしても、還相の菩薩にしても、自力の手をはなして、水火の中、生死煩惱の稠林の中につつ、無上菩提の種子が、遂に朽ちず、破壊せず、失わぬものは、誠に仏念力住持のたまものであります。

父が子を念ずるそこには、何かあるはずである。母が子を念ずるそこには何か願いがあるはずである。仏が衆生を念ずるそこには、ただ漫然たる念があるのではなくて明かに念願があるはずです。仏念とは何であろう。子の念と、親の念とが行違つたのでは、親子共に助からない。親の念と、子の念と、仏念と念仏とが、機法一体になつた時、そこに仏凡一如一体の世界が生れて来るのであります。

仏念の第一義としたもうは何であるのか、それは明らかであります。「無上菩提の種子」であります。無上菩提心こそは、如来の全てあり、菩薩の全生命であります。しかも衆生心によつて発し得ないものであります。しかし衆生が真に生き、成仏し、尽未来際にわたつて、如来浄土の眷族として、これだけは成就しなくてはならぬものが、無上菩提心であります。衆生がおこし得ずして、しかも衆生が、菩薩となり、大涅槃を証して成仏するになくてはならぬもの、そして、それが如来本願力によつてのみ発起するものが、無上菩提心であります。でありますから、仏念の焦点は、無上菩提心であります。如来は無上菩提心以外の何ものをも、一大事因縁とは考えたまはぬのであります。凡夫の貪瞋の念は、八億四千でも、仏念は唯一絶対であります。凡夫の心配と、仏の大悲とは違つてるのであります。

無上菩提心とは、具体的には、他方の大信心であります。天親菩薩が「我一心」と言われたものがそれであります。

第十八願の信心海こそは、まことに仏念と念仏とが完全に一致せられた世界であります。いいかえると仏念の全体が、念仏のすべてとあります。仏念即念仏であります。

続いてお話して来た、莊嚴眷族功德成就の、

「如来淨華衆正覺華化生」

において、淨華衆即ち、淨華（如来絶対人格の王座）が生む無量の眷族とは、実にかくの如く、仏力に住持せられて、無上菩提心に生きる菩薩のことでもあります。信心の行者のことでもあります。如何なる水火の中にあろうとも、智慧をまつとうじ、慈悲をまつとうじて、自利利他一如に融合せる、無上菩提心、即ち大信心に生きぬく人こそ、如来淨華の衆と言われるのであります。……以下略